

# 学部教員と附属学校園教員とのC・T授業 (Collaborated Teaching) による ESD授業の開発 (1)

伊藤 裕康・北堀 宏\*・三野 健\*  
(社会科教育) (附属高松中学校) (附属高松中学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部  
\*761-8082 香川県高松市鹿角町394番地 香川大学教育学部附属高松中学校

## Developing Lessons for ESD based on the Collaborated Teaching by an Attached School Teacher and University Teacher (1)

Hiroyasu Ito, Hiroshi Kitahori\* and Takeshi Mino\*

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

*\*Takamatsu Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University,  
394 Kanotsuno-cho, Takamatsu 761-8082*

**要 旨** 大学教員と附属教員とのC・T授業 (Collaborated Teaching) による2009・2010年度 (以上 (1)), 2011年度のESD授業開発 (以上 (2)) の実際を報告する。大学教員と附属教員との年間を通じた連携による授業開発により, ①大学教員と附属教員とが対等に学びあう関係が構築され, ②①の関係の構築の上に, 公開研究会に向けて大学教員と附属教員とによるC・T授業に基づくESD授業開発がなされ, ③附属教員の学会への参加が見られるようになった。

**キーワード** ESD授業の開発 大学教員と附属教員の連携 C・T授業  
世界地理と世界史の融合

### I 附属学校教員と大学教員との連携の留意点

#### 1 連携による共同研究の契機としての公開研究会の研究授業開発

桂・平良木 (2010) は, 公開研究会の研究授業が附属学校と学部教員のそれぞれの職務の特色を生かした共同研究を深める契機となると述

べる。2011年度香川大学教育学部附属高松中学校 (以後附属高松中学校) 研究公開まで, 共同研究プロジェクト開始から9ヶ月ほどある。連携の柱に公開研究会の授業開発を据えた。

ところで, 大学教員は研究会で公開する授業づくりに関与する余地が少なく, 授業の大枠が決まってから, 関係することが多い (桂・平良木2010)。伊藤は, 7年間に渡る香川大学教育

学部附属坂出中学校（以後附属坂出中学校）社会科教員との協業による授業開発から、附属学校教員と大学教員との信頼関係構築の大切さを学んだ。今では、附属坂出中学校の研究公開以前から公開授業の検討に参加している。附属学校と学部教員のそれぞれの職務の特色を生かした共同研究を深める公開研究会の研究授業となるには、学部教員と附属学校園教員との信頼関係の構築が切に求められる。まず、附属学校教員と大学教員との信頼関係の構築を考え、その上での授業開発が大切であると捉えた。

## 2 C・T (Collaborated Teaching) 授業の構築

「教員養成と教育現場」の協働では、大学教員が一定期間附属の授業や行事に参加する連携システムの構築が求められる。福岡教育大学教員の組織的な附属学校での授業という先導的試みも一時間の単発的なT・T授業である。附属学校のニーズに応え、大学と附属学校が同等の立場と権利・義務で行うC・Tの実現が求められる(西崎 2002)。「真の連携授業(Collaborated Teaching)になるためには、附属学校園の教員サイドの学びたいこと、児童・生徒の学びたいことにも関心を払い、希望を生かしてけるように取り組むべき」(西崎 2002)である。公開研究会の授業の開発では、附属高松中学校社会科部（以後社会科部）教員の学びたいこと、生徒の学びたいことや希望を生かすことに留意し、附属学校のニーズに沿う学部教員と附属学校園教員とのC・T授業開発に心がける。このことは、附属学校教員と大学教員との信頼関係の構築にもなる。

## 3 公立学校でも実践可能なESD授業の開発

教科教育学等の最新成果を踏まえた授業提案をしても、「附属学校だからできる授業」との声をしばしば聞く。そのような声が大勢を占めたなら、地域教育の先導役たる附属学校の意義も揺ぐ。公立学校でもある程度の授業が可能な授業開発が求められる。公開研究会用の授業開発では、教育現場全体に共有可能になるよう心がける。

教育現場全体に共有可能なC・T授業として、ESD (Education for Sustainable Development = 持続発展教育)<sup>1)</sup>に着目した。日本の提唱でDESD (Decade of Education for Sustainable Development = 「国連持続可能な開発のための教育の10年」)が2005年から始まっている。ESDは人類が挑戦すべき今後の重大な課題を主要学習課題とする。それ故、傍観者的に物事を眺める外観主義的授業は、ESDでは許されず、当事者性を育む授業実践が求められる(伊藤・北岡 2010a, 伊藤・北岡 2010b)。重要な教育のESDであるが、教育現場での実践は遅々として進まない。文部科学省も実践の遅さを感じ、中等教育資料の平成22年12月号で「持続可能な開発のための教育(持続発展教育)」の特集を組んだ。

授業開発が愁眉の課題であるESDの授業を開発し、成果を公開することで、地域教育の先導役たる附属学校の真価が発揮できる。附属高松中学校社会科教員もESDに関心があることから、ESDによる教育現場全体に共有可能なC・T授業の開発を試みる。ESDによる教育現場全体に共有可能なC・T授業開発では、学習指導要領の内容と表1の「私たちと次の世代の

表1 「私たちと次の世代の生命と暮らしの持続可能性を妨げる課題にどんなものがあるか」に関わる課題

領域	課題
社会・文化	【人権】人種や民族、性、障害等をめぐる差別や偏見の解消 【平和】戦争やテロの防止、核兵器・地雷・不発弾等の除去、海洋の安全 【文化】異文化理解推進、歴史的遺産や文化等の多様性と伝承・継承 【健康】HIV・エイズをはじめとしたグローバルな感染症等の病気の予防・治療と食や薬の安全 【統治】民主的で誰もが参加可能な社会制度の実現、公正な権利と収益の保障 【犯罪】地域や学校・家庭で起こる犯罪や非行・いじめ・虐待等の防止とケア 【情報】学校や家庭を超えた個人情報漏洩、ネット犯罪、情報操作や扇動、情報格差の解消
環境	【天然資源・エネルギー】水・石油・原子力・レアメタル等の資源・エネルギーの維持、漁業資源の維持、森林破壊防止と生物多様性の保持 【農業】持続可能な農業の実現 【環境】地球温暖化等の地球環境破壊の防止と回復、森林破壊防止、海洋汚染の防止 【農村開発】持続可能な農村生活の実現 【都市】持続可能な都市生活の実現 【災害】多発する風水害等の様々な自然災害の防止と緩和
経済	【貧困削減】途上国・先進国間、各国における経済格差や貧困の克服 【企業の社会的責任・説明責任】企業の社会的責任・説明責任の促進 【市場経済】公正な市場経済の実現

(伊藤2010)

生命と暮らしの持続可能性を妨げる課題にどんなものがあるか」に関わる課題を考慮し、題材設定を行う。

## II 学部教員と附属学校園教員とのC・T授業によるESD授業開発前史—2009年度の試み—

### 1 学部教員の示唆を受けた附属学校園教員のESD授業開発

伊藤の助言を受けた実践が、北堀実践「戦後日本の成長と国際関係～高度経済成長と持続可能な社会～」と三野実践「持続可能なまちづくりと公共交通～新時代の高松のまちを構想する～」である<sup>2)</sup>。北堀実践は、歴史的分野の学習で、高度成長により忘れ去られたライフスタイルに「持続可能な生活」の在り方を問い直すヒントを探らせた実践である。三野実践は、自動車への過度な依存をやめ、LRTを導入した持続可能なまちづくりを考えさせた実践である。

### 2 学部教員によるESD授業

2010年3月10日と15日、附属高松中学校2年生の3クラスを対象に、伊藤が「小京都とはなにか?」の飛び込み授業を実施した<sup>3)</sup>。既に附属坂出中学校の安藤孝泰教諭との協業による「小京都」がある(伊藤・安藤2008)。本授業は、先の先行実践でも採用した物語論的アプローチをさらに押し進め、語ることで伝統が創られるこ



写真1 伊藤の飛び込み授業「小京都とはなにか?」

とを認識させることと、観光まちづくりによる持続可能なまちづくりの考えを捉えさせようとしたものである。同授業の有効性を確認できた。

### 3 附属高松中学校での院生の授業

琵琶湖疎水と京都のまちづくりの関係を追究した飛び込み授業「北垣知事を救え!!京都復興大作戦」を実施した。平成20年度学習指導要領社会に準拠したESD教材の開発をねらっている。琵琶湖疎水は、日本最初の水力発電所(商業用としては世界最初)を誕生させ、人々の飲料水をまかない、水運を興し、京都の産業振興が図られた。しかも、京都の景観を配慮して琵琶湖疎水のルートが決定されている。

授業実践後は、教材としての有効性を確認した内容を、ESD用地域副読本『水土里のパイオニア～人々の暮らしと水とのかかわり～』の「第2章 日本一の湖・琵琶湖」の「1. 大都市京都、衰退の危機」に組み込んだ。



写真2 院生による「北垣知事を救え!!京都復興大作戦」の授業

2009年度の試みにより、連携しての共同研究を行う環境が整った。

## III 学部教員と附属学校園教員とのC・T授業によるESD授業開発の実際—2010年度の試み—

### 1 院生による附属高松中学校での授業 2010年度の伊藤担当の「教育実践基礎研究

Ⅱ」の受講生4名中、2名が中国人留学生である。院生による附属高松中学校での飛び込み授業は、中国人留学生も参加可能な授業構成を考えた。同飛び込み授業は、ESD用地域副読本に組み込みたい内容を授業にかけ、その有効性を検討するESD用地域副読本開発の一貫でもある。毎年刊行していたESD用地域副読本は、刊行費用等の理由から2010年度の成果を踏まえ、2011年度に刊行することになった。

授業を構想する頃から、尖閣諸島問題を巡って日中関係が悪化した。事前アンケートでの生徒の中国へのイメージは、大変悪い(図1)。

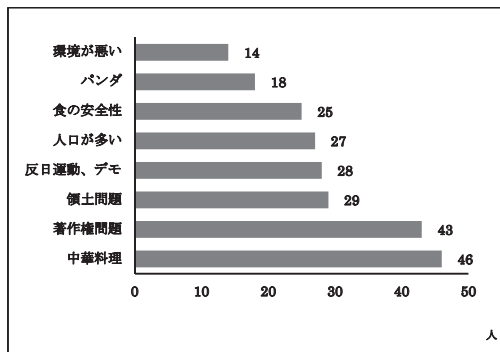


図1 附属高松中学校2年生の中国に対するイメージ【複数回答】

当初、ホットな話題である春秋航空の高松空港就航から、中国人観光客が関西圏だけを旅行することなく、香川も旅行してもらえるようなツアープラン作りの授業を考えていた。ツアープラン作りの際、中国人の嗜好やものの考え方をゲストティーチャーとして中国人留学生から聞き取りするという形である。だが、あまりに中国のイメージが悪くなったので、まず一衣帯水の関係とも言える日中関係に焦点化し、中国が日本にとって重要な国であることを認識させた上で、中国人観光客が香川も旅行してもらえるツアープラン作りの授業に変更した。

2011年1月26日、附属高松中学校2年生全クラスで、123頁の指導案に沿って授業を行った。院生は、生徒の友好関係構築への意識は高まったが、日本にとっての中国の必要性への意識が十分でないとして反省し、指導案の修正を行った。



写真3 生徒の質問に答える中国人留学生

中国人留学生の感想からは、ゲストティーチャーとして生徒の前に立つ緊張とともに、日中関係の険悪さから、生徒からどんなことを言われるかというプレッシャーもあったことが分かる。

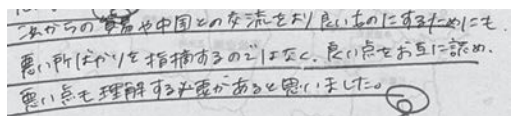
○ アンケートでひどいことを書いていた生徒だが、実際に会って話をしてみると、意外と可愛くて、授業もスムーズに進めることができた。

2組に1人中国出身の生徒がいた。その生徒に、夕食はコンビニ弁当とホテルバイキングのどちらがいいか質問されたところ、夕食はホテルでゆっくり食べて、朝食はコンビニでおにぎりか何かを買って、食べた方が時間の無駄にならないと答えたら、「それは日本人やん?」と言われた。普段考えたことがなかったが、それも日本人と中国人の食文化の違いかと感じた。

アンケート結果の影響を受け、1時間目は緊張した。そのため、自分が何を話していたかを全く覚えていない。2時間目から生徒たちに可愛さを感じ、警戒心もなくなり、自然に話せるようになった。

○ 今度の基礎研究が私の人生で初めて先生として学校に行く経験でした。非常に緊張しました。授業の映像を見て、あまりに緊張しており、声が小さかったことが分かりました。今回の経験では、先生という仕事の大変さが分かりました。ある生徒が「中国人もお酒が好きだから、お酒を飲んで、ちょっと酔って、買い物に行く」と言うなど、生徒はみんな可愛いと思い、できれば将来先生になりたいと思いました。

見回った時は、生徒からあまり質問されなかったもので、自分から声をかけるようにしていたのはよかったが、どういうタイミングで話に入ったらいかがよく分からなかった。



日中友好の観点から国際協調の視点が見られる生徒の感想文

第2学年社会科学学習指導案

学習指導者 高橋 範久・竹村 勇治

1. 日時 平成23年1月26日(水) 第1～3校時

2. 本時の学習指導

(1) 目標

- ・21世紀におけるわが国の発展には、中国が大きな影響を持つことを認識することができる。
- ・春秋航空の高松空港就航の新聞記事から、中国への関心を高め、郷土文化の魅力を認識することができる。

(2) 準備物 教師：新聞記事、日本に対する意識調査、ワークシート、香川県の観光案内パンフレット

(3) 学習指導過程

○教師が行う支援 ●教師が行う評価

学習内容及び活動	指導上の留意点(指導・支援の手立て)
1. アンケート結果及び中国人の意識調査資料を確認する。	○依然として日中間の印象は悪いことを提示する。一方で、日本と中国は緊密で重要な関係であることを気付かせるために、身の回りの中国製品に目を向けるよう助言する。その際、中国製品がなくなったことを想定させることで、中国製品が私たちの生活の一部となり、生活そのものを支えている要素であることに気付かせる。
2. 日本の貿易の実状について教師の話を聞く。	○反中意識を持つ生徒たちに日中貿易の実状を提示することで、日中間は非常に密接で重要な関係であることに気付かせる。その際、日米貿易の実状についても提示することで、日中貿易の重要性を一層意識させる。 ○資料を参考に今後の日中貿易について問うことで、日本の成長には今後一層発展するだろう中国の存在が欠かせないことを気付かせる。その際、両国の友好関係に基づいた相互成長の視点に留意する。
3. 春秋航空に関する新聞記事を読む。	○中国人の来日目的を予想させた上でG.T.の話を紹介し、中国人が持つ日本に対する概念の多様性を捉えさせる。 ○格安の料金を紹介し、中国人の来日のし易さを気付かせる。その際、中国人観光客が香川に滞在することが、香川の経済の活性化の好機と捉えるよう助言する。
4. 学習課題について思考する。	○香川県の観光案内を配布するとともに、G.T.に中国文化や中国人の嗜好について質問するよう促すことで、プラン内容を充実させるよう助言する。
(1) コンセプトを決定する。	
(2) 旅程を決定する(宿泊先、交通手段、費用等含む)。	○高松(香川)に経済効果をもたらすこと及び、中国人観光客の嗜好を捉えたプラン作成を意識するよう助言する。その際、交通手段等についても留意させることで、交通の実態についても考えさせる。
(3) 白地図に高松空港からの経路を決定する(最終的には、本四連絡橋を利用し、大都市へ向かう)。	○各グループがG.T.に質問した内容を、随時板書することで、他のグループの活動の助けとする。また、なかなか作成できないグループについては、何を主たる目的とするのかについて考えるよう助言する。 ●時間や費用等の面から、実現可能性が十分に高いかどうか。 ●高松(香川)の特色をアピールするもので、かつ、中国人観光客が再訪したいと思う内容かどうか。
5. 次時の予告をする。	○各グループで作成したプランを集め、中国人留学生による投票を行い、次時にその結果を周知することを伝える。

(4) 評価

- ・日本の発展のために、中国の存在の必要性を認識し、友好関係の意識を持つことができたか。
- ・G.T.の話をもとに、自分の考えを深め、意見を交換し合い、多面的な視点を持ち、郷土に対する愛着を持つことができたか。



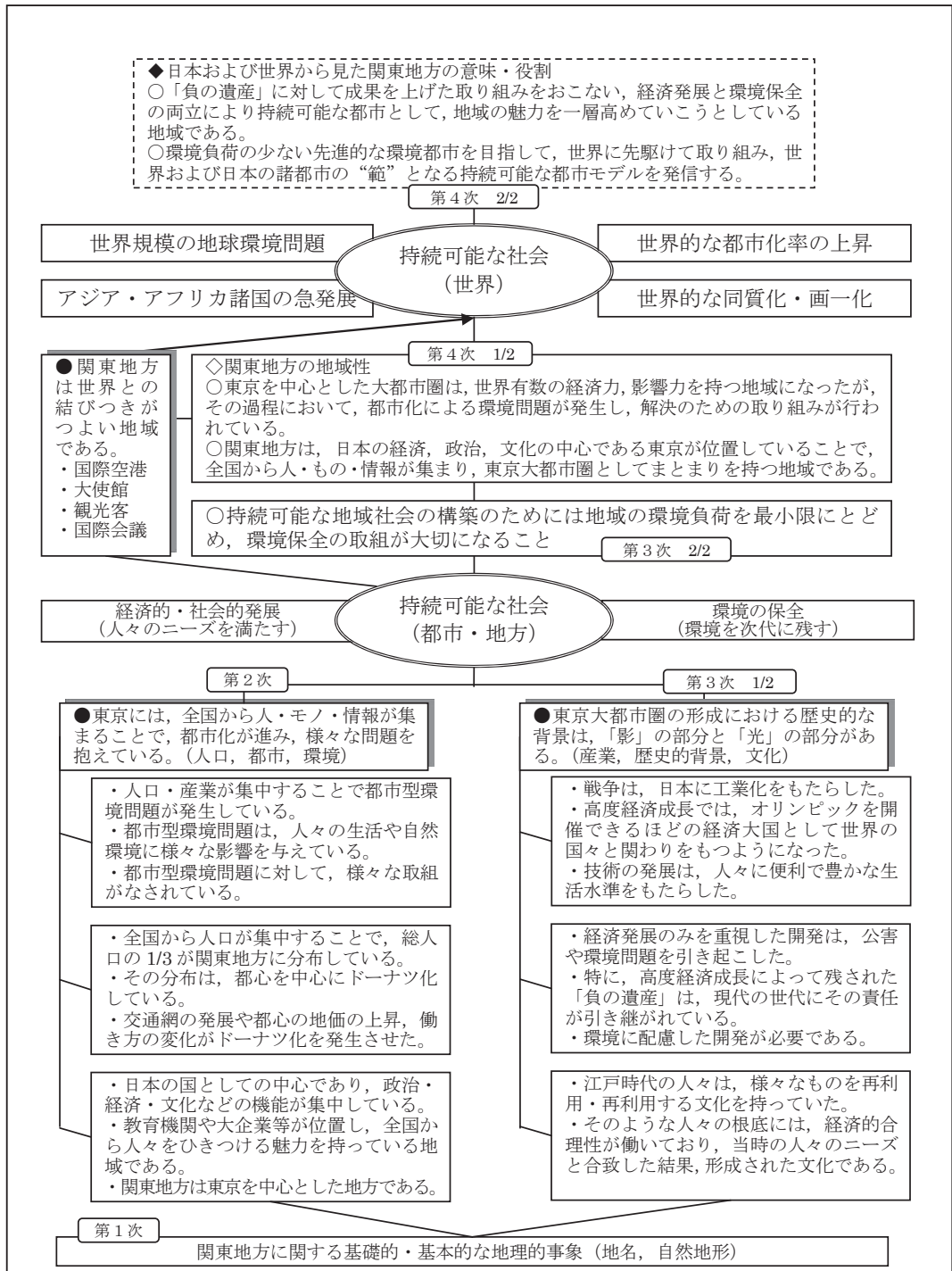


図2 「関東地方—環境問題や環境保全を中核とした考察—」の単元計画

3 公開研究会の研究授業開発にむけて  
 社会科部の2010年度研究主題は「世界的な社会認識をもとに、持続可能な未来を志向する社

会科教育のあり方—世界地理と世界史を重視した学習を通して—」である。主題設定及び研究内容に直接関与しなかったが、「持続可能な未

来を志向する社会科教育のあり方」に伊藤が精力的に研究するESDへの志向性が認められる。2009年度の伊藤の示唆を受けた附属学校園教員のESD授業開発の影響が伺える。社会科部の目指す社会科像は、次のとおりである。

#### (1) 社会科部の目指す社会科

生徒達の歩む現在と未来の世界は、環境問題や南北問題、安全保障のあり方等国境を越えた地球規模の課題が山積する。中学校社会科が、先の今日的な課題を解決するために有効な学びとなっているだろうか。これらの課題を解決する資質を育成する上で、中学校社会科で扱う世界全体の知識や概念の不足を痛感してきた。「社会科アンケート」を県内の11中学校で実施した結果の分析から、今日的な課題に対して「課題が山積し見通しの暗い未来の世界を、明るい世界にしていきたい」とは考えているが、その方法が分らない」という香川県下の生徒像が浮かび上がった。今日的な課題への記述を求めたところ、環境問題や食糧自給率、安全保障等の記述が、学年が進むにつれて多くみられた。これらは、世界各国との協力や調整を図ることで解決を目指すことが可能な問題である。多くの生徒が「自分たちの力だけでは、未来社会の問題を解決できない」と答えたこともうなずけられる。

そこで、世界地理と世界史を重視した教材を開発し、実践を試みた。平成20年度学習指導要領で示された世界の地域（主に6州）ごとの学習の前に、各地域の歴史を取り扱う教材を開発・実施する。地理的・歴史的な世界観を育成することで、より世界的な視野から今日的な課題の解決を図る資質を育成するのである。

#### (2) 未来志向科との関連

社会科の性格上、実験的試みである未来志向科との関連性を図ることが求められる。未来志向科との関連性を、次のように捉えた。

未来志向科で取り扱う今日的な課題の多くは、国境を越えた枠組みで対応策や解決策を考えていくべき課題である。社会科で得た知識や概念、資料活用能力等の技能を、未来志向科の学習で活用してきた結果、未来志向科を進める

上で不足するのは「世界」に関する知識・概念であることが分った。それ故、平成20年度学習指導要領が、世界の地誌的な学習を位置づけたことは意義深い。未来志向科でも、その知識や概念は大いに活用すべきである。だが、歴史的分野は日本史が大半を占め、世界史は日本と関係の深い地域や時代、つまり古代からの東アジア、近世以降の欧米の歴史が扱われている程度である。グローバル化する世界で、世界の国々と共に手を携え課題を解決するには、異文化理解が欠かせない。それには、それらの文化の歴史的な背景を知ることが大切であり、世界全体の概括的な歴史を理解しておくことは極めて重要である。

#### (3) 研究内容及び方法

##### 1) 研究内容

世界地理と世界史を重視した単元を開発・実践する。平成20年度学習指導要領に準拠し、世界の地域（主に州）ごとの学習を行う際、その地域の歴史的分野の学習を導入部で実施する。地域割りは、アジア、アフリカ、南アメリカ、北アメリカ、ヨーロッパ、オセアニアの6地域である。6地域の歴史を学ぶ動機付けとして日本の歴史や現在の生活との関連を考えさせて学習を行う。これらの実践から世界の諸地域の歴史を学習する有用性について検証・考察する。

##### 2) 研究方法

世界史の教科書試案を作成し、それを活用した授業を実施する。授業後に世界の諸地域についての知識や概念が身についたかどうか、ワークシート及び定期テストの記述から分析する。また、授業前後にアンケート調査を実施し、世界の地理的事象と世界史を関連させてその知識や概念を学習したことで、世界に対する理解がどう深まったか、今日的な諸課題に対する見方や考え方がどう変化したかについて検証する。

#### (4) 実践内容

##### 1) 題材の考察

世界地理と世界史の有機的な繋がりをもった教材を開発・実践し、グローバルな視野をもった社会認識をもとに、今日的な諸課題を解決する生徒の育成を目指す。教材開発をする際、次



の3点を重視し、試案教科書や資料を作成し、授業実践を行った。

- より客観的な史実に基づく教材となるように、合意形成の図られた複数資料（高校の世界史の教科書や著名な研究者の専門書等）を参考とする。
- 世界の諸地域の伝統や文化については、それらが形成された自然や風土などの地理的事象と関連づけた教材とする。
- 世界の諸地域の価値観を尊重する態度を育成するため、宗教や慣習などを表面的に取り扱うことを避け、その根拠や歴史的背景を認識できる教材とする。

以上のことを踏まえ、西アジアや北アフリカ等イスラーム世界の歴史の学習を中心に実践した。ペルシャ湾沿岸地域を始めたイスラーム世界の国々は、環境問題や南北問題、エネルギー問題で重要な位置を占めるとともに、オイルマネーを中心に世界経済や金融に多大な影響を与える。また、イスラーム世界は、バルカンから旧ソ連諸国、南アジア、中国と、ユーラシア大陸を横断する広大な帯として分布する。現在の国際情勢を理解し、わが国の安全保障のあり方を考える上でも、この地域は重要なポイントの一つである。

## 2) 単元目標と計画

単元目標は、世界の各州の地理的事象と歴史的事象をまとめた概念として認識することが目標となる。イスラーム世界についての単元目標は、以下の通りである。

### 【目標】

- ① 西アジアの風土や民族などの地理的事象や、イスラーム世界の歴史的事象に対する関心を深め、その地域的特色や歴史的背景について理解し、その知識を身につけさせる。
- ② 西アジアの地域的特色を、地理的事象を的確に把握できる主題や歴史的背景を見いだせる課題について資料を適切に選択して読み取り、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現できるようにさせる。

### 【単元計画】

大単元名〔世界の諸地域とそのあゆみ〕

※▲世界の諸地域のあゆみ（計12時間）

※△世界の諸地域（計21時間）

【計33時間 ※すべて1年時に実施】

▲アジア世界のあゆみ（6時間）

① 東南アジア・南アジア

② イスラーム世界

- ・中東で生まれた3つの宗教
- ・イスラーム世界の誕生と帝国の栄光
- ・イスラーム世界の慣習

△アジアの地理（5時間）

【アジア世界 計11時間】

▲ヨーロッパ世界のあゆみ（3時間）

△ヨーロッパの地理（4時間）

【ヨーロッパ世界 計7時間】

▲南北アメリカ世界のあゆみ（2時間）

△北アメリカ・南アメリカの地理（9時間）

【アメリカ世界 計11時間】

▲オセアニア世界のあゆみ（1時間）

△オセアニア（3時間）

【オセアニア世界 計4時間】

平成20年度学習指導要領で示された時数との相違点は図1の通りである。

【平成20年度学習指導要領】→【附属高松中学校社会科】

〔地理的分野〕 世界の諸地域 約24時間 〔歴史的分野〕	〔地理的分野〕 世界の諸地域 約21時間（-3） 〔歴史的分野〕 世界の諸地域のあゆみ 約12時間（+12） 古代までの日本 約17時間（-3） 中世の日本 約11時間（-2） 近世の日本 約20時間（-2） 近代・現代 （-2）※2年時
古代までの日本 約20時間 中世の日本 約13時間 近世の日本 約22時間 近代・現代 ※2年時	

図3 授業時数の単元別の増減

## 3) 指導の実際

### ① 試案教科書の作成における工夫

世界の諸地域の歴史の試案教科書作成では、中学生として適切と考えられる内容を精査し、高等学校世界史教科書との関連を図った。重視

した精査の視点は、次の3点である。

- その地域特有の価値観形成に大きく関わる伝統や宗教の背景とその成り立ち
- 自然・気象・地形など地理的な諸条件と歴史との関わりや位置的な広がり
- 中学生として、理解しておくべき用語（人物名・地名・重要語句）の精選

2010年度作成した「イスラーム世界のあゆみ」試案教科書の小単元名とその主な内容と試案教科書（写真5）を示す。

- |   |
|---|
| <p>1 文明の十字路口 ～イスラーム世界の風土～<br/>イスラーム世界の広がる西アジア・北アフリカ<br/>一帯の自然・風土・文明の起こりを取り扱う。</p> <p>2 中東で生まれた3つの宗教<br/>ユダヤ教・キリスト教・イスラームの3つの宗教<br/>の起こりと関連、その中心的な教義について取り<br/>扱う。</p> <p>3 イスラーム世界の誕生<br/>ムハンマドによって創設されたイスラームが西<br/>アジア・北アフリカ一帯に広まっていった過程を<br/>取り扱う。</p> <p>4 イスラーム帝国の栄光と分裂<br/>宗教をよりどころとして国家を形成・維持して<br/>いったイスラーム帝国の栄光と分裂、現在との関<br/>連について取り扱う。<br/>〈イスラーム世界試案教科書の小単元名〉</p> |
|---|



写真5 「イスラーム世界のあゆみ」試案教科書

② 価値観を尊重する意識や態度を育成する工夫

世界の諸地域の価値観を尊重する意識や態度の育成には、伝統や習慣を表面的に取り扱うのではなく、その根拠や歴史的背景について理解が重要である。授業実践では、我々から見れば奇

異に感じたり、不思議に思える伝統や習慣の根拠や歴史的背景を十分考察することを重視した。

また、伝統や習慣によって地域特有の文化が形成されたことが理解できるよう、現在の生活への影響も発見できるよう配慮した。例えばイスラーム世界では、偶像の否定とそれによるアラベスク等の芸術の進展、断食とイスラーム世界の歴史や地理的条件との関連等である。

③ 身に付いた知識や力をテストで評価する工夫

定期テストの作成では、以下の4点を評価できるよう配慮した。

- 精査した用語（人物名や地名、重要語句）が理解できているかどうか。【知識理解】
- イスラーム世界の広がりや特色を、資料から読み取れるかどうか。【資料活用の技能】
- イスラーム世界の習慣の根拠や背景が正しく理解できているかどうか。【知識理解】
- 異文化の人々と接するうえで重要な見方や考え方が身に付いているかどうか。【思考・判断】

以下は、評価に活用した定期テストの一部である。

- |  |
|--|
| <p>(5) イスラーム世界で、資料Ⅳのような幾何学模様が発達した理由を、次の言葉を使って簡単に書け。</p> <p style="text-align: center;">【 偶像崇拜 】</p> <p>(6) イスラーム世界の慣習とその背景について書いた次のア～エから<u>正しくないもの</u>の一つを選んで、記号で書け。</p> <p>ア 利子の否定＝お金をもうけることはいやしいことであり、まして利子を要求することは神の教えに反する。</p> <p>イ 一夫多妻＝ジハードにより夫を失った未亡人の救済、豊かな人が多くの人を養うべきという考え方がある</p> <p>ウ 豚肉の禁忌＝豚肉を不浄としていたユダヤ教の影響や、伝染病などの予防が原因であったと考えられる。</p> <p>エ 断食月＝厳しい自然環境の中で「食」への感謝と、一食分を貧しい人に分け与えるという考え方がある。</p> <p>(7) グローバル化が一層進む世界の中で、イスラーム世界など伝統や文化の違う国や人々と付き合っていく上で大切であると考えられることを簡単に書け。</p> <p style="text-align: right;">〈出題例 1年後期中間試験より〉</p> |
|--|

(5) 2010年度の成果と課題

1) 世界の諸地域を学ぶ有用性

① アンケート結果から

世界の諸地域の歴史学習前後に、同じ内容でのアンケート調査を実施した。主な質問項目は以下の通りである。

- ア 日々の生活の中で、日本以外の世界の諸地域で起きているできごとに関心をもって聞いたり、考えたりしていますか。
- イ 世界の歴史を学習することは、地球温暖化などの環境問題を解決したり、これからのわが国の産業のあり方を考えたりする上で大切であると考えますか。
- ウ 世界史の内容が増加する分、日本史の内容が削減することについて、良いと思いますか。また、その理由について、書いて下さい。

アンケート結果は、次のとおりである。アの質問に「はい」と答えた生徒数の13%増加は、世界史の学習によって、世界の諸地域の出来事に関心を持つ生徒が増加したといえる。イの質問に「はい」が10%増加し、世界史の学習が今日的な課題を解決する上で有効であると考える生徒が増加したことが分る。もっとも大きく変化したのがウの質問である。世界史の学習の実施前は、世界史の学習が増加分だけ日本史の学習が減少することに76%が反対していた。しかし、実施後に反対する生徒は41%減少し35%となった。「はい」と答えた生徒の理由は、「世界の国々と付き合っていくには相手国の文化や歴史を知る必要がある」(類答含む)という趣旨が約50名、「日本史は小学校で学習しており、中学校の歴史的分野とも重なっているところが多い」(類答含む)という趣旨が約25名であった。

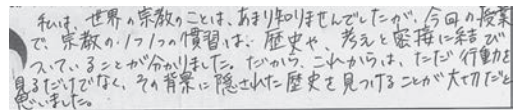
項目	実施前 (123名)		実施後 (122名)	
	はい	いいえ	はい	いいえ
ア	87人	36人	101人	21人
	70%	30%	83%	17%
イ	99人	24人	110人	12人
	80%	20%	90%	10%
ウ	30人	93人	79人	43人
	24%	76%	65%	35%

アンケートの結果から、今後一層グローバル

化が進む現代社会で、世界の諸地域の歴史を中学生で学習する意義は大きいと考えられる。

② 授業及びワークシートから

イスラーム世界の歴史を学ぶ前に、イスラームの知識についてアンケートを実施した。大多数の生徒が予想以上に知識がなかった。試案教科書や授業で使用した資料も生徒たちには未知の内容が多く、大変興味深く授業に参加していた。以下のワークシートのまとめには、異文化理解の上で大切な意識や態度が記述されている。実践から、伝統や習慣の背景にある地理的事象や歴史的事象に目を向ける重要性に気づかせることができたと考えている。



生徒のワークシートのまとめ



写真6 「イスラーム世界のあゆみ」の授業

これらのことから、世界史の内容を世界地理と組み合わせて学習する今回の教科の見直しは、平成20年度学習指導要領中学校社会科の目標である「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことにつながったと考えている。

2) 課題～汎用性・客観性の高い教材づくり～

2010年度はイスラーム世界の歴史を中心に実践を行った。今後も他の地域の教材開発において、いかに汎用性や客観性の高い教材を作成していくかが大きな課題である。内容の取り扱い

も、中学生の時期に必要な世界史の知識の量や質についての検討が必要である。さらに、試案教科書の作成とともに、学習指導要領試案の作成も今後の課題である。

#### IV 2011年度公開研究会の授業開発の実際

##### 1 公開研究会に至るまで

2011年6月10日の公開研究会に至るまでに、筆者等は電話で何度か授業開発に関わるやり取りをしたほか、4月19日と5月28日、伊藤の研究室において公開研究会の授業の検討も行った。やりとりの主なものは、世界地理と世界史を重視した学習にかかわることと、研究公開を行う「ヨーロッパ世界の歩みと今」にかかわることであった。

##### (1) 大学教員からのコメント

###### 1) 世界地理と世界史を重視した学習について

研究主題「世界的な社会認識をもとに、持続可能な未来を志向する社会科教育のあり方－世界地理と世界史を重視した学習を通して－」のメインタイトルは、ESDに関する授業開発が愁眉の課題であることから、時機に適っている。サブタイトルと関わる世界地理と世界史を重視した単元開発の先行研究では、筑波大学附属中学校の地歴総合分野設定という実験的研究が挙げられる。同研究は、現行の地理的分野、歴史的分野、公民的分野の3分野制を、世界地理と世界史を融合した世界分野、日本地理と日本史を融合した日本分野、そして国際分野の3分野制を目指す画期的な構想であった。ただ、学会レベルでは渋澤(1981, 25-38)が世界分野の成果を発表したのみで終わっており、必ずしも成功しなかったように思われている(全国地理教育学会地歴歴史科研究小委員会2008, 96)。しかし、社会科部の世界地理と世界史を重視した単元開発は、新たな3分野制の提案ではない。しかも、中学校歴史的分野で極めて手薄な内容である世界史を重視した単元開発である。時間が増加した平成20年度学習指導要領中学校社会科を考えれば、あながち実現不可能と

は言えないと思える。また、現在高等学校の地歴科では、地理、日本史、世界史との相互連携が問われている。本試みは、高等学校地歴科のあり方に示唆を与え、中高の接続にも寄与ができるものと考えられる。

課題として挙げられた汎用性や客観性の高い教材や中学生の時期に必要な世界史の知識の量や質の問題は、研究主題に立ち戻って考えるべきであると考えている。持続可能な未来を志向する社会科教育の観点から、教材や知識の量や質を考えていけばよい。それには、表1「私たちと次の世代の生命と暮らしの持続可能性を妨げる課題にどんなものがあるか」に関わる課題に繋がる教材や知識なのかと検討していくことが有効である。時間数が多く、現行の歴史的分野より世界の歴史の内容が含まれていた昭和52年版学習指導要領に準拠した教科書から、世界の歴史の内容を抽出し、先の観点から加除修正することが簡便な方法として考えられる。その際、持続可能な問題の歴史的背景としての世界の近現代史にも目配りしたい。

なお、今後、世界地理と世界史を重視した「イスラム世界」の開発・実践をするなら、ハラルの問題は宗教と食文化の点から是非取り上げたいものである。また、チュニジアの革命やエジプトの革命に見られるように、大きな反政府デモが金曜日に起きる原因も取り上げたい。生徒は、宗教が如何に人々の暮らし、さらには社会の成り立ちに関わっているかを認識することが出来る。このことは、平成20年度学習指導要領改訂のポイントである様々な伝統や文化、宗教に関する学習を充実することとも関わることである。

###### 2) 歴史の舞台としての地理的環境を捉えさせる必要性

ローマが日本の東北地方の北端、ベルリンやロンドンが北海道より北のサハリン、スペイン南端でさえ、名古屋付近といったヨーロッパの地理的位置は、中学生には認識されていない。中学生時代に世界の地誌を学習してきていない今の大学生も、ヨーロッパの地理的位置に対する認識は極めて怪しい。だからこそ、まずは

ヨーロッパの地理的位置をしっかりと捉えさせたい。

このことは、なぜ日本よりはるかに高緯度にあるヨーロッパが温帯にあるのかを考えさせることにもつながる。ヨーロッパは海岸への接近度が高く、西欧では最深部でも400kmほどしか海岸から離れていない。それ故、暖流の影響が強い西岸海洋性気候が広がり、高緯度の割に温暖な気候となっている。

さらに、ヨーロッパの自然環境に向けた目を深めていきたい。例えば、地中海は交通の障害になるほどではなく、むしろ早くから水運が発達し、フェニキア人等の海洋民族が活躍していた。時代が下っていくとヨーロッパの人々の活躍の舞台が北海・バルト海・大西洋海と広がっていった。ヨーロッパは、海とむすびついて発展をしてきたと言える。

別枝(1989, 160)は、ヨーロッパは、「面積が比較的狭いうえに、平野、盆地、大小の山脈、半島などにより、地形上細かい部分に分れている。いわばアパートメント的構造を示し、各室ごとに個性ある民族が占拠し、国をつくってきた。」と述べている。ヨーロッパの地形上におけるアパートメント的構造は、後述する小国の分立の一つの要因ともなっている。さらに、別枝(1989, 160)は、「アジア・アフリカのような、克服しがたい巨大な自然がなかったため、各民族の移動や接触が容易であり、それは場合によっては、激しい対立や抗争ともなり、ある場合には融和、親和を示す。ヨーロッパの歴史が分裂と統合、多極化と一元化のくり返しでもあった一因はここにある。」と述べている。

また、東ヨーロッパがギリシャ正教、フランスを除いた西ヨーロッパがプロテスタント、南ヨーロッパがカトリックと大雑把に分かれるとしても、キリスト教世界ということでは統一される。EUへのトルコの加盟がなかなか認められないのも、EUがキリスト教クラブの側面がなきにしもあらずであるからである。また、かつては、共通語としてラテン語が存在していた。これらのことに気づかせることは、平成20

年度学習指導要領改訂のポイントである様々な伝統や文化、宗教に関する学習を充実することとも関わっている。

いずれにしても、単元の最初からヨーロッパの歴史を学ぶより、まず歴史の舞台としての地理的環境をしっかりとおさえることが大切である。

### 3) アイデンティティ形成の大切さを捉えさせる必要性

北堀教諭から、「宗教戦争など、血塗られた戦乱の歴史のなかで、ヨーロッパ諸国で多数の小国家が存続を可能にした理由は何なのか。国家国境を超えてしのぎあう現代の国際社会のなかで、私達日本人が、ヨーロッパの歴史から学ぶべき見方や考え方があるのではないか。」と問われた。そこで、伊藤は小さな国が生き残るには、軍事力や経済力と言ったハードパワーではなく、文化といったソフトパワー<sup>4)</sup>が必要となることを述べた。日本の漫画、Kポップや韓国ドラマ等の韓流を考えれば、文化の力の大きさは分ろう。また、文化の力に着目させることは、平成20年度学習指導要領改訂のポイントである様々な伝統や文化、宗教に関する学習を充実することとも関わるだけでなく、生徒のアイデンティティ形成にも資することである。さらに、文化に着目させながら他地域の歴史と地理を学ぶことは、生徒の開かれたアイデンティティ形成にも繋がっていきこう。

### 付記

本論文「学部教員と附属学校園教員とのC・T授業(Collaborated Teaching)によるESD授業の開発」は紙幅の関係で、(1)と(2)に2分割した。図表等の番号は(1)(2)で通しとした。また、注と参考文献についても(1)(2)で通しとし、(2)の末尾にまとめて表示した。